

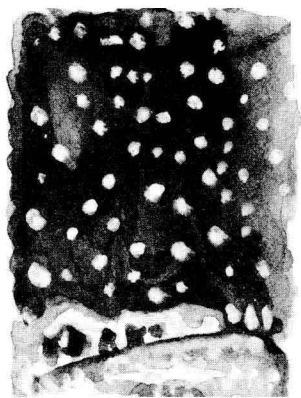
結婚の夜

有馬頼義



結婚の夜

有馬頼義



有馬頼義 ● 結婚の夜

昭和47年3月31日 第一刷発行

昭和50年3月31日 第十三刷発行

定価 九八〇円

著者 有馬 頼義

発行者 藤山 真人

発行所 株式会社 東邦出版社

東京都新宿区西堀一ノ三五四
電話東京二〇二七六三一・三
振替東京八五二七五

目 次

序章	5
告白	12
キynchャー氏髓内釘固定法	25
窓の中	44
失踪	58
断章(その一)	71
狂信者	78
再会	91
再び、眠りを	104
断章(その二)	124
過去がやってきた	131

結婚の夜	256
重大な疑惑	237
S 3 5 (その二)	230
S 3 5 (その一)	224
初冬の人	211
くらい道	198
孤城	184
断章(その三)	177
生物反応	157
指	144

序 章

昭和二十五年五月。霧の深い、夜であった。私鉄の郊外の駅のホームのベンチに、二人の男が、坐っていた。更けていたので、電車の往来も、間遠であった。にじんだような信号灯の色が、ホームから見て、東側のも、西側のも、赤になる時間は、短い。ホームには、二人の男のほかに、人影がない。駅舎の電灯の向うに、静かな街が、ひっそりと横たわっているだけであった。一台の上り電車がこの駅を去り、尾灯を、濃い霧の中に没し、その電車からおりた、僅かな数の客が、改札口を通して、街の方へ姿を消してしまうと、改札掛も、改札口をはなれて、建物の中へはいった。

二人の男は、ベンチに腰かけたまま、上り電車にも、下り電車にも、乗る様子がない。しかし、誰も、その二人に、注意を払う者は、いないようであった。

「仕方がないのだ」と、一人が、呟いた。

「仕方がない、と言ったって、僕には、許せない。みんなが、運が、悪かったただけだ。三人のね。しかし、此処に、もう一

人の、不運な女をこしらえる必要はないじゃないか」

「しかし、四人にはならない。一人不幸になれば、一人は救われるのだ」

「僕には、ひとを不幸にすることによって、その人間が、救われるとは思えない。法律というものがある。そして、多分、この場合、人間の良心というものの存在も、忘れることは出来ないだろう。そのことを、黙認すると、君も、僕も、その瞬間から、良心の苛責に苦しむようになる」

「それも、考えているよ。しかし、過ちは、既に、過去において、起っている。消すことは出来ない」

「過ちというものは、責めるべきではない。僕は、この話は、仕方のないことだとは、思っていない。過去に起ったことは、確かに、仕方のないことだったのだ。僕は、君の意見に賛成出来ないね」

「しかし、こうやっていて、どうなると思う？」

「時間が、解決するだろう。いや、他にも、方法がある。われわれが、遠くへ、はなれてしまうことだ」

「どっちが？」

「どっちでもいいさ」

「はなれる方が、未来を、失うことになるのだよ」

「東京にいらなくても、仕事は、出来るだろう」

「友情を、どうするのだ？」

「友情は、二人の間の距離とは、関係がない」

「川畑君。友情が、距離と関係がないのなら、奥さんの心の中の問題も、距離とは、関係がないのだと、思わないか。距離が、解決してくれるとすれば、それは、再び、戻れない距離が必要なのだ。そして、多分、時間もね」

「そうだろうか。僕は、もうしばらく、説得という方法をやってみるつもりだ」

「無駄だ」

「離婚してもいい」

「川畑君。離婚は、解決にはならない。もし、それで解決出来るのなら、僕の方が、離婚すべきだ。君は、奥さんを、愛している」

「君もね」

「その通りだ。しかし、そうでなければ、何も、問題は、ありはしないのだ。君に、これだけは言っておく。事のはじまりは、僕の過失にあったのだ。だから、責任は、一方的に、僕の側にある」

「僕は、君に、話さなければよかった」

「話してくれた方がよかった。そうでないと、僕たちの知らないうちに、事件が、起ったかも知れない。そうすれば、そのあとのことは、僕たちの手のとどかないところで、処理されることになっただろう。不運な人間は、三人でなしに、間

違いなく、四人になったのだよ」

「僕は、こうも、考えた。君には悪いが、かりに、君と、英子さんが、別れたとする。それで、解決するだろうか。その場合、みどりは、別れてしまった英子さんのことは、忘れることが出来るかも知れない。しかし、君に対する気持は、やはり残るだろう。もし、君が再婚すれば、また、同じことが起るだろう。逆に、僕が、みどりと離婚したとする。みどりが、いい人を見つけて、あのことを忘れればいいが、もし忘れないとすると、今度は、僕の目の届かないところで、同じ状態が、続くのだ。僕の考えは、間違っているか」

「間違っているはいないね。残念ながら」

「僕には、どうしていいか、わからない」

「僕たちは、医学をやらずに、女性心理学を学ぶべきだった」
力石浩史の頬に、そのとき、微笑が浮んだようであった。

下りの電車が、駅の構内にはいつて来た。駅員が、一人、ホームに上って来て、ものうい声で、駅の名前を言った。おる客も、少ない。電車が行ってしまったとき、再び、ホームには、人影がなくなった。

「終電まで、もう何本もない」と、力石浩史は、言った。

「こうしよう。とに角、二人を、会わせるのだ」

「二人きりで？」

「勿論、僕たちは、その結論にしたがうより仕方がない」

「悪いことが、起りそうな気がする。どこで逢わせるのか」

「何処でもいい」

「……………」

川畑重幸は、黙り込んだ。

「ただし、お互いに、充分注意することだ。殴り合い、噛み合う位は、仕方がない。しかし、二人が、何かを、持っていることは、想像出来るからね」

「四人で、会った方が、よくはないか？」

「みどりさんを、余計刺戟することになるだろう。少なくとも、僕は、いない方がいいのだ」

「意味がないように思うがね」と、川畑重幸は言った。「会って、話して、気がすむ段階ではない」

「しかし、仕方がない。何かが起ったら、われわれで、後始末をすればいいのだ」

「浩史君。やっぱり、そこまで、考えているのか」

「考えている。ある過ちが起った。地の底で、石灰が、地下水にとけて、空洞が生じたのだ。バランスがくずれている。自然の力は、そのバランスをとり戻すために、地震を起す。同じことではないのか。人間は、いつかは、自分のおかした過ちに復讐されるものだ」

「それを、甘んじて、受ける、というのか」

「受けよう」

「不可抗力だったのだ、実際」

「不可抗力であったかどうか、誰も、知りはない。知っているのは、僕だけだ。その僕は、不可抗力だったとは思っていない。あれは、僕の未熟による過ちだ」

「状況を考えてみたまえ。そりや、あのとき、僕は麻酔をかけられていた。しかし、僕も医者だ。あの状況で、あれ以上のことが、出来たとは思えない。そのことは、みどりに、何度説明したか知れないんだが……」

「意識を、失っていた、君の証言を、奥さんが信じるわけがない」

「場所？」と、川畑重幸がきいた。

「僕の自宅へ来てもらおうよ。僕は、その晩少し遅く帰ろう」

「僕は、どうするのだ？」

「君の自由だ。一緒にいて来てもいいし、自分の家で、待っていてもいいだろう」

「仕方がない。みどりを、君の家へやる前に、みどりが、何を持っているか、調べよう。僕に出来ることは、それだけだ。そして、みどりが、英子さんに会っている間、僕は、君の家を見張っている」

「刑事のように、ね」

「浩史君。僕は、君との友情が、妻への愛情よりも、はるかに重くないことを、すまないと思う」

「お互いさまだ。しかし、それでも、世間の人達の友情とは、比較にならない程、僕たちの友情は、かたいのだよ」

「忘れない」

夜霧は、更に、濃く、深く、なったようであった。次の上り電車が、その、濃い、夜霧の中から、姿をあらわしたとき、二人の男は、ベンチから腰をあげた。

その晩も、霧が、深かった。

力石浩史の自宅を、川畑重幸の妻のみどりが訪問したのは、夜の八時前後のことである。

力石英子は、和服を着て、客を迎えた。英子は、そのとき、二十五歳であった。

「お待ちしていました」

「しばらく」と、みどりは言った。

空気が、凍りついた。

「御主人は？」

「まだ戻っていません」

「わざと、ですか？」

「いいえ、どうしても、都合が、つきませんでしたの。夕方、電話がありましたけど、——出来るだけ早く帰るから、ご迷惑でなかったら、おひきとめするように、って申しました」

「そう。あなた、あたしが、今夜、此処へ伺ったのは、あな

たよりも、浩史さんにお会いしたかったからだ、ということとを、御存知でしょうね」

「ええ。ですから、しばらく、お待ちになっていただきたいのよ」

「あなたとは、何も、お話しすることは、ないのよ」

「多分、そうだろうと思っていました。でも、あたしは、あなたにお会いする必要がありましたわ」

「そう。どうしてでしょう？」

「あたし、力石浩史の妻ですわ」

「だから？」

「あたし達、今迄、あのこについて、直接、話し合ったことがありません」

「主人同志が、とめたからだわ」

「そうですわ。でも、何故、とめたのでしょうか？」

「そんなことは、今更おきにならないでも、わかっていらつしやるでしょうに」

「間接に、ですわ。でも、あたしには、納得出来ませんでした。主人同志は、仲のいいお友達でした。今でも、何故、妻

同志が、友達になれないのでしょうか？」

「いやがらせを、おっしゃるのね」

「あなたは、何故、御主人の説明を、信じようとなさらないの？」

「信じるとか、信じないとか、そういうことではないからだわ。あたしは、結果を、問題にしているんです」

「でも、世の中には、仕方のないことだってありますわ」

「仕方がないから、あたしが不幸になっても、いいとおっしゃるの？　ねえ、英子さん。あなたには、あたしの立場がわかりにはならない。あたしが、そして、川畑が、あれからどんなに苦しんだか——。あなたの方のように、幸福な方には、わかりはしないのよ」

「何故、あたし達が幸福だと、断定なさるの？」

「そんなこと、言う必要はありません」

「不幸だから、幸福な人間を恨むのが、当然だとおっしゃる……」

「一般論じゃないのよ。この理屈が正當なのは、あたし達四人の場合だけです」

「あなたは、どうしたい、とおっしゃるの？」

「浩史さんが、あたしの前に手をつけて、あやまったら、許して上げますわ」

「そう。じゃあ、お断わりします。あたし、妻として、良人に、そんな真似はさせたくありません。あなたは、浩史を、殺してしまいたい、思っていらいっしやるのでしょうか？」

「出来れば、そうしたいわ」

「何故、実行なさらないの？」

「……………」

「こわいのね、法律が。それとも、勇気がないの？」

「英子さん！」

「お茶でもいれますわ」

お茶の用意は、既に、出来ていたようであった。英子が、応接間に、みどりを残して、姿を消していた時間は、意外に短い。英子は、五分と、経たないうちに、紅茶のセットを、銀盆にのせて、その部屋へ、戻って来た。そのセットは、力石浩史が、英子と結婚したとき、川畑重幸と、みどりが、贈ったものであった。

「このセット、覚えていらいっしやるでしょう」

「ええ」と、みどりは、答えた。「同じものを、あたし達も、いただいたわ。主人同志も同じ年齢、あたし達も、同い年。結婚したのも、出征したのも、帰って来たのも、一緒だったわ。多分、あの、ことさえなかったら、あたし達二組の夫婦は、ずい分仲がよくて、幸福な夫婦だったでしょうね」

「皮肉には、馴れましたわ。あなたの口から、直接聞いたのは、今晚が、はじめてだけれど、あなたの言葉は、毎日毎日、あたしの耳に聞えていた」

「良心の苛^{かじ}嘖^{げん}というものだわ」

「そうかしら？　どうぞ、紅茶をあがって。毒は、はいっていませんわ」

「英子さん」と、みどりは言った。「今日、家を出るときに、あたし、主人に、身体検査をされたのよ。ピストルか、毒藥を持っていないかどうか。どう？　これが、あたし達夫婦の生活なのよ。でも、滑稽ね。あたしが、その氣になれば、主人の身体検査なんて、いくらでも、ごまかせてよ。家を出てから、毒藥を、買うことも出来るわ。車の中に隠しておくことも、ね」

「それじゃあ、みどりさんは、今夜、主人に会えなければ、落胆なさるわね」

「いいえ。何も、今晚に限ったことはないでしょう。それに、あたし、さっきも言ったように、今のところ、浩史さんを殺そうと考えていないわ。手について、あやまってもらいたいだけ。——浩史さんは、わざと、帰らないのでしょうか？」

「帰ります。帰らなければなりませんわ。でも、手について、あやまるなんて、させませんわ」

「浩史さんが、それを、なさると言ったら？」

「今夜のこと、川畑さんと、主人の間で、相談されたことですわ。御存知でしょう？」

「ええ」

「主人同志は、もっと違ったかたちの解決をのぞんでいた筈ですわ」

「多分ね。でも、そう、うまくゆくかしら？」

「恐らく、人間の忍耐には、限度がある、ということですわ。お紅茶を、どうぞ」

「ただくわ」

紅茶茶碗を持つときに、みどりの指が、かすかに震えたようであった。英子の視線は、冷たい。英子も、黙って、紅茶茶碗をとり上げて、口に運んだ。再び、空気が凍りついた。沈黙は、今度は、英子によって、破られた。

「みどりさん。あなたは、自分のことしか、考えていないのね」

「どういう意味？」

「あなたは、浩史を恨んでいる。あやまらせた、殺したい、そう思い、川畑さんを、責めたのでしょうか。でも、そういうことを聞いている、あたし達の氣持を、考えたことがあつて？」

「……………」

「あのことが、かりに、浩史の過失であつたとしたら、それなら、浩史は、そのことで、どんなに苦しんでいるでしょう。かりに、あたし達が幸福で、あなた方が不幸だとしたら、あたし達は、どんな努力をしても、あなた方を、少しでも幸福にして上げたいと思うでしょう。そういう風には、考えたことはないの？」

「……………」

「そして、それにもかかわらず、あなたの憎しみは解けず、あたし達が、良心の苛責のほかに、あなたから、不当な苦しみを、受けて、そして、あたし達の忍耐が限界を、越えたとき、どうすると思つて？」

「……………」

「あたしは、みどりさんを、殺そうと考えるかも知れないのよ」

「そんな馬鹿な話って、あるかしら。逆恨みというものだけ」

「どうぞ、紅茶を、すっかりのんで頂戴」

「あたしを、殺そうというの？」

「さあ。話をしただけ。あなたが、あんまり、御自分のことしか考えていないから、そう言ったのよ。浩史は、自分も一緒にいて、話し合おうかと言ったわ。あたしが、とめたの。八時に、みどりさんが来るから、九時すぎに、戻って来て頂戴って、頼んだのよ。もうじき、九時になるわ。浩史に、手をついて、あやまれって、言つてごらんさい。浩史は、あなたの言う通りにするかしら」

「あたしは、そのために、今晚来たのよ！」

力石英子が、崩れるように、じゅうたんの上に倒れたのは、そのときであった。

「英子さん！ どうしたのよ！」

みどりが、英子の中から、かかえあげたとき、英子は、

生きていなかった。

「誰か、誰か来て！」と、みどりは叫んだ。

告白

昭和三十七年一月。

会社の昼休みに、兄の健一から電話がかかって、ちょっと会いたい、と言って来た。別に珍しいことではない。健一は、時々、伸子を、昼食に誘うことがあった。健一の会社は、西銀座で、伸子の会社は、溜池だから、大ていは、伸子の方から、銀座へ出かけて行く。しかし、その日は、伸子の会社の近くの喫茶店を、健一は指定してきた。ちょっと外へ出るには外套がいのうがいらぬ位、暖かい日であった。

健一は、伸子の会社の近くへ来てから、電話をかけたようであった。伸子が、その店へ行つたとき、健一は、奥の方のボックスで、待っていた。

「めしは？」と、健一はきいた。

「まだよ。お兄さんが、御馳走してくれると思ったから」

「今日は、ちょっと、そのひまがないんだ。トースト位にしておけ」

「薄情ね」

「今日は、話があるんだ」

注文をしまつと、健一は、話があるんだ、と言いながら、なかなか、その話を、はじめない。

「久しぶりで、この辺へ来たが、ずい分変わったな」

「どうか変わったの？」

「昔はね、この通りは、自動車会社と、修理工場ばかりだった。それが、大会社、ホテル、ナイトクラブなんか、ふえて来ている。ひとかわ裏が、花柳界で、反対側は、山王様だ。雰囲気かんいが、違つてきた」

「知つたような顔をして……」と、伸子は、笑つた。

「知らないわけでもないさ」と、健一は言つた。「もっとも、戦争前のことは知らない」

「用つて何なのよ」

「……………」

「ねえ」

「スキーの話だ」

「スキー、——スキーが、どうしたの？」

「別に、とめはしないし、君が、その話を、うちで持ち出したとき、僕は賛成した。しかしゆうべから、何となく、気になりはじめたんだ」

「どういう意味？ 女ばかりだから？ それとも、コースのこと？」

「いや、そういう意味でもない。何となく、いやなことが、起りそうな気がしたんだ」

「お兄さんらしくもない。お兄さんは、あたしの腕を、知っているでしょう。一緒に行く五月^{きつ}さんにしろ、麗子にしろ、下手じゃないわよ」

「それは、知っている」

「三人そろって、同じときに休みをとることだけで、大変だったのよ。女には、からだの具合もあるし……」

「わかってるよ」

「苦心さんたんして、一年に何日の休暇をあわせて、宿の予約もして、——今更、かえられやしないわ」

「そうか」

「それに、あたしの家なんか、いい方よ。五月さんとこじや、御両親を説きふせるのに、一カ月かかったわ。女三人でいうのも、よしあしね。うちじや、男の人が一緒だと、お母さんが心配するし、麗子のところでは、女ばかりじや心配だっていうの。よっぽど、お兄さんも一緒だ、って、嘘をつこうかと思った位だわ」

「伸子。おれの言うのはな、そういうことではないんだ」

「じゃ、何よ、遭難？ そりや、人の集まる温泉場のゲレンデじゃないわ。だけど、あの辺の山、危険はないのよ。一月だし、東北本線と、常磐線の間を、直線に歩くだけ。距離に

したって、初心者でも、一日で歩けるわ。熊位、いるかも知れないけど……」

「弱ったな」と、健一は頭をかかえた。「そういうことでもないんだ。何と言ったらいいか、わからない」

「変ね。お兄さんは、縁起をかつくの？」

「そう言うだろうと思った。しかし、そうでもないんだ」

「わからないわね」

伸子は、少しばかり、焦立って来ている。

「あたしに、スキーの手ほどきをしたのは、お兄さんよ。ユースの相談もしたわ。十三日の金曜日でもないし、天気予報もいいわ。何が起るっていうの？」

「伸子。おれ、少し、どうかしているかも知れない」

「心配だったら、一緒に来てよ」

「それが、どうしても、駄目なんだ。僕は今、会社を休めない。今日の話は、聞かなかったことにしてくれ」

「おかしな、お兄さん」

「おれの心配には根拠がない」

「用心するわよ。でも、青春で、いくらか冒険が伴うものでしょう？ 三泊四日。最初の日は、足ならしをして、二人に、よくツアーの講義をして、それから、登るわよ。半日登って、多分、下りは、四、五時間。ゆっくり休んで、昼間の列車にのるわ。どこに、心配があって？」

「ない」

伸子は、笑い出した。

「お兄さんこそ、交通事故に気をつけた方がいいわよ」

「そうしよう」と、健一は、頷いた。

「今晚、もう一度、スケジュールを相談するわね」

「ああ、そうしよう。七時頃までに、帰る」

喫茶店で、健一と話したのは、それだけである。伸子は、会社へ戻り、午後の仕事を続けた。健一の話の記憶は、すぐに薄れた。

高杉伸子が、はじめてスキーをはいたのは、小学校のときであった。兄の健一が、中学、高校、大学を通じて、スキーの選手だったから、伸子は、いいコーチに恵まれて、急速に上達した。後に、伸子の仲間も、健一のコーチをうけた。

「スキーは、特に女の子は、子供の時から、スキーをはかなければ駄目だ」と、健一は、伸子が大人になってから言った。

「子供のときは、見栄や、羞恥心や、臆病がないから、すぐに転ぶことを覚える。スキーの基本は、転ぶことなんだよ。」

女は、大きくなると、見栄をはり、スタイルを気にし、変な転び方をする。つまりだ、膝をつぼめて、坐るような転び方をするんだ。これは、からだの、ある部分を、特別に意識している証拠だ。ズボンをはいているのに、スキー場で、銭湯と同じような意識が働く」

「いやらしいことを言うわね」と伸子は、笑ったが、中学や高校からスキーをはじめた仲間のことを考えると、思い当たった。健一の言うことは、必ずしも見当違いではない。

「ほかのスポーツでもそうだろうが、からだの一部分に、特別に意識が集中したり、スタイルを気にしたら上達しない。美しいスタイルは、うまくなれば、自然に出来るものだ。それと、僕が不思議に思うのは、元来、日本人は、膝が強い筈だ。それが、かつて、遠い昔に、日本の跳躍選手が、世界に君臨した一つの理由だよ。今は、少し、考え方が、かわって来たがね。日本人は、畳の上に坐る。変な話だが、便所の構造もそうだ。そのために、膝が強い。強い筈だったんだ。ところが、女の子に、スキーをやらせてみると、膝が一番いけない。僕はそれから、考え方をかえた。伸子の勉強部屋を椅子にしよう、と言い出したのも僕だ。伸子は、選手になれる素質があったからね」

「お気の毒さまでした。あたしは、スキー選手になる気はなかったわ。平凡な女なのよ。学校を出て、二、三年会社づとめをして、いい人をさがして、結婚して、いい奥さんになります。そのかわり、男の子が出来たら、スキーの選手にするわ」

伸子は、そういう風に、答えたものだ。

高杉家は、代々、堅い家庭であった。父の邦定も、こつこ